

ぢやかな。アツハツハツハツ。あの慌てる事どうぢやい。正直者やなア。イヤ來年の戎講まで預けとこ、戎講には送さんで。……併し次兵衛どん怒つてなや。實は昨日あの姿を見てな。こりや萬一とすると帳面に無理でも出来てやせんかと思ふて、まア氣を悪ふ仕て呉れてやと困るが。昨夜、夜通し掛つて帳尻丈けを大略調べて見たんや。處が帳面にはコツカラ先きの無理が仕て無い。あゝア俺や感心しました。貴方は甲斐性者や。甲斐性で儲けて甲斐性で遣ひなはる。豪いなア。世の中に沈香も薫かす屁も放かずちウのが有るやろ。そんな奴は明きやへん。そんな凡暗に何が出来ていな。人の叱驚する様な錢遣ふ度胸が有てこそ、人の叱驚する様な錢が儲かるのや。是れから先きもドン／＼遊んどくれや。俺しぢやとて未だ老ひ耄れてやへん。稀には連れても貰ふわいな。アハハハ。……併し昨日は叱驚したで。宜ふ酔てたなア……マアこれ其様後退りせえでも可えちウのに……何や妙な事云ふたで……エ、久しふお目に掛りまへん御機嫌宜しふとか。承りますれば何様とか斯様とか、何や豪ふ長い事逢わん様な挨拶を仕てやつたが無論酒の上の事やるなア」

「いえ、モウ彼の時は酔も何も何處へやら、スツカリ醒めて居りましたが、彼様申し上げるより仕様が御座りまへんでした。」

「フーン。こりや又妙な。毎日顔を合してゐるや無いか」

「處が向ふで顔を見られた時は、失敗ふた。これが百年目やと思ひました。」



大津繪と大津繪節

のが大津繪節の始まりで有ると云ふ。大津繪節は弘化、嘉永の頃から安政、萬延、文久にかけて最も盛であり、出版元も京都では丸屋、吉野屋、其他、大阪では富士屋、河内屋、錦車堂、大鹿屋、石川屋、松榮堂、伏見屋、綿屋等數十軒を算する全盛振で有つた。

大津繪節、元唄

げほふの梯子剃り。雷太鼓で釣をする。お若衆は鷹を据え。塗り笠おやまは藤の花。座頭の坊のふんどしを、犬がくわえりや仰天し、杖をば振り上げる、荒氣の鬼も發起して鉦撞木。瓢箪鯨で押えましよ。奴の行列釣鐘辨慶、矢の根五郎。

右の元唄を現今行はれて居る節に倣め様としても合ひ兼ねる、節の變遷を語る好材料で有る。

昔吃の又平が書き創めたと云ふ大津繪は、其發祥の地粟田口附近が、佛教に縁の深い土地で有る丈けに當然其影響を享けて、佛説を基とした畫題が多く選ばれた。當時此繪は次の様に夫れ／＼「呪ひ」又は「守り」として珍重せられた物である。げほふ。(無病長壽) 雷(雷除け) 鷹匠(失せ物戻る) 藤娘(良縁を得る) 座頭(倒れぬ) 鬼(小兒の夜泣き止め) 瓢箪鯨(水難除) 鎗持(道中安全) 辨慶(水難盜難除け) 矢の根(惡魔除け)。文化文政の頃大津柴屋町の妓女達が粟田口で賣る大津繪を並べて唄ひ出した